

夏季テーマ展「てくてく福島 芭蕉と旅する」後期開催中です。

【開催期間】5月16日(土)～8月9日(日) -入館無料-



テーマ展
「てくてく福島 芭蕉と旅する」

風流のはじめ館

蕉門之像撰併書画

内藤漸風 (当館蔵)



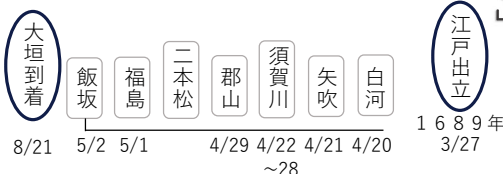
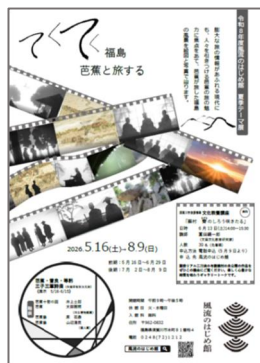
芭蕉翁三十六俳人並双幅(画)部分 狩野永耕

(当館蔵)



展示品の紹介

芭蕉は尊敬する西行が和歌に詠んだ遊行柳をみた後、みちのく入りを果たします。県内の旅の距離は約200km、日数にして13日間、6つの宿泊地を数えます。



芭蕉には全国に300人とも2000人とも言われるほど、多くの弟子がいました。さまざまな人との関わりのおかげで、自分の俳諧を高めていき、芭蕉が亡くなった後も弟子たちによりその偉業は引き継がれていきました。

題名の由来は？

仙台から多賀城跡に続く古道から名前がつけられたともいいます。「おく」には奥州の意味が「ほそ道」には芭蕉の人生が重ねられています。

目的は？

芭蕉はあこがれのみのこの歌枕や歴史の舞台となった地を訪ね、尊敬する西行法師や能因法師、悲運の武将・源義経の足跡をたどりました。何より、まだ見ぬ景色や自然、文化に触れ、地方に暮らす弟子や俳人たちと交流をし、自分の俳諧をみがきたいと考えていたのです。

どんな内容？

江戸時代、46歳の芭蕉が弟子の曾良とともに江戸を出発して、関東、東北、北陸地方をめぐり、大垣(岐阜県大垣市)までの約1500日間にわたる旅です。

おくのほそ道って？

2026
第35号
7月号



文化教養講座

ふそん
蕪村

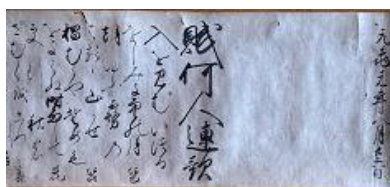
薺のしろう咲きたる

「今、目に映っていること」に先生の言葉が重ねられていきます。

講師 富田鋼一郎先生 (文芸文化教育研究家)



会場に展示された未公開の蕪村の初期作品の作風や人となりを多角的にお話いただきました。作品を「見る」だけでなく、「考え」、「話す」ことで新たな発見もあり楽しい時間を過ごしました。



賦何人連歌巻子 里村紹巴一座 (1570年)

深田嘯風子亭半歌仙草稿

内藤文草 (1700年)



歴史史料寄贈

6月13日、富田鋼一郎様より中世の連歌から近世俳諧の歴史文化史料5点をご寄贈いただきました。今後、須賀川市の史料として大切に保存活用を図り、後世に伝えていきます。

連歌

和歌的で雅な世界。平安時代、貴族や武家の間で発達しました。

俳諧

庶民的で滑稽的な表現。室町時代後期から江戸時代にかけて大流行しました。

俳句

芭蕉によって「和歌」と同じ、ひとつの芸術にまで高められ、その後、与謝蕪村や小林一茶らすぐれた俳人により、俳句の世界が広がっていきます。

